

〈『神学大全』 翻訳完成記念特集〉

『神学大全』の完訳によせて

片 山 寛

私は『神学大全』第23巻(II-2, q.171-182, 預言と異言, 観想的生
活と活動的生活)の翻訳に加わせていただき、そのおかげで光栄にも
『神学大全』の翻訳者の中に麗々しく名を連ねているのですが、その実
態は、稲垣良典先生の偉大な訳業のほんの一部をお手伝いして、しかも
先生に手を入れていただいてようやく完成することができたにすぎませ
ん。ですから、本来はここに一文を掲載するには値いしない者でありま
す。しかし他方では、私は長年、稲垣先生のお仕事をおそらく一番近く
から見てきた証人であり、また先生のお訳しになった各巻の校正と索引
作りにも陰ながら協力してきました。稲垣先生が翻訳なさったのは、全
39巻中21巻(ここでは便宜上、合本されて一冊の書となったものを
「巻」とする)に及びますが、その中の15の巻で、私は校正や索引、あ
るいはその両方を担当しました。ここではそのような立場から、2, 3
の思い出を語らせていただこうと思います。

1 稲垣先生との出会い

稲垣先生に私が出会ったのは、1982年に西南学院大学神学部の神学
専攻科を修了して、福岡市内で小さな教会の牧師をしているときでした。
牧会のかたわらで、もうすこし専門的に神学を学びたいという願いを持
った私は、神学部で組織神学を教えてくださいました寺園喜基先生のお勧め
で、九州大学大学院文学研究科を受験することにしました。受験のため
のご挨拶に、稲垣先生の研究室を訪問したのが、先生との最初の出会
いでした。先生は穏やかな笑みを浮かべて私を迎えてくださり、勉学の

在り方について懇切に助言をしてくださったと思います。それから毎週、私は、神学部で不十分だったラテン語に磨きをかけるために、(入学前でしたが) 九大の先生のゼミに通うようになりました。

先生は当時 53 歳、1972 年に南山大学から九州大学に移られて 10 年目の、多くの仕事を精力的にこなしておられる時期でした。勁草書房の『トマス・アキナス』と、講談社の「人類の知的遺産」シリーズの『トマス・アキナス』(現在の講談社学術文庫版と同一)を相次いで出版なさったのが 1979 年です。ちなみにこの二書は、同じ時期に書かれたのですが、内容的な重なりは少なく、むしろ互いに響き合い、補完するような内容ですので、両方を読み合わせると最良の入門書になると思います。

先生が『神学大全』の翻訳に参加なさったのは、1977 年の第 13 卷(法について)が最初でした。その後、第 11 卷(1980)、第 15 (1982)、18 (1985)、16 (1987)、14 (1989)、19 (1991)と、ここまでが先生の九州大学時代の翻訳です。他の翻訳者が放棄したり、翻訳不可能な状況になるたびに、先生が引き受けられたのだと聞いております。私は、大学院の学生を 3 年間した後に 1986 年に九大文学部の助手に採用されましたので、先生とのかかわりはより深くなりました。

稲垣先生はいつどのようにしてあのような膨大な仕事をこなしておられるのか、それは当時の私にとってひとつの謎でした。学部長や評議員や国際交流委員など、国立大学の重要な役職をつとめながら、また(毎回新しい)講義や演習の準備をしながら、『習慣の哲学』(1981)、『抽象と直観』(1990)のような大きな学術書を執筆されるのみならず、日本語や英語の論文やエッセイ、一般啓蒙書、『神学大全』をはじめとする翻訳の数々が次々に生れます。それは分量だけとってみても、私には奇跡としか思えませんでした。私はその頃、もしかすると稲垣先生は、本当は二人おられて、一人が大学で学生の相手をしている間に、もう一人がどこかで執筆しておられるのではないか、などと空想していました。

先生が九大を退官なさる少し前から、それまで先生から教えを受けていた学生や卒業生たちは、お互いに相談をして、月に一回、土曜日に稲垣先生のご自宅を訪問して、先生に教えを乞うことにしました。「トマス研究会」と名付けるこの研究会は、息の長いもので、22 年後の現在

もなお続いています。この研究会以外にも、私はしばしば先生のお宅に参上して、ご著書の出版やご講演についての先生の構想をうかがうようになりました。それらの執筆のための資料を探したり、ご著書の校正なども引き受けました。私設の秘書のようなものになりたいとは思ったのです。当時私は短期大学の教員をしていましたが、自分なりに「学問」への参与を継続するためには、このような方法しかないと思えました。その頃のことですが、私は野球の野村監督の「生涯一捕手」というのをもじって、自分は「生涯一助手」でいくんだと、ひそかに決心したことがあります。

考えてみると、トマスの時代には、学問というものはすべて、何らかの意味での共同作業でありました。著作者をとりまく共同体を抜きにしては、書物が執筆され、書物の形になり、さらに写本されて広まってゆくというプロセスは成立しません。今日では、大学という制度でさえも、特に文系の学部では、ばらばらの個人である教員と学生たちのゆるい集合にすぎないと思われる場合が少なくありません。その傾向は近年さらに強まっています。それは学問の歴史にとっては、かなり危機的なことではないかと私は思うのです。

2 索引づくり

『神学大全』の索引づくりを私がするようになったのは、九大在学中の第18巻からです。最初の頃は大学院生の共同作業でした。パソコンでソート（並べ替え）できるようになる前でしたので、各自が分担して書き抜いてきた原稿を、短冊のように切って、それをのりで台紙に貼り付けてゆくのですが、作業中に時ならぬ風で短冊が飛び散って、一同、恐慌をきたしたことがあります。第14巻からは、私が一人を担当するようになりました。

索引を作成するためには、どの単語や熟語を拾うべきかについての判断が必要になりますので、テキストを繰り返し読まなければなりません。日本語では同じ単語でも、ラテン語が異なる場合がありますし（たとえば「状態」が *status*, *conditio*, *dispositio* など）、逆に同じラテン語の単語を先生が様々に訳し分けておられる箇所もありますので（たとえば *ratio* が理性、根拠、理由、本質側面など）、いちいち原文を参照しはじ

めると、きりなく時間がかかります。とりわけ私は、将来の Thomas Lexicon 日本語版の基礎資料になるような索引をつくろうと志しておりましたので、しばしば索引づくりに非常に長い時間がかかって、創文社の担当者の小山光夫さんや松田真理子さんを困らせました。

索引づくりに関しては、ずっと最後まで自分が担当しようと心に決めていたのですが、2009 年から小さな学部ですが西南学院大学の神学部長を 4 年間引き受けざるをえず、その多忙のために、最後の 2 巻 (37-38 分冊 (2011), 39-40 分冊 (2012)) は、担当できませんでした。それが心残りであります。

3 完訳までの歩み

『神学大全』の翻訳は、稲垣先生が退官後、福岡女学院大学、そして長崎純心大学で教鞭をとられる間も、営々と続けられました。副学長や大学院研究科長などの要職を勤めながらですので、このペースには驚異的なものがあります。発行年の順に並べると、次のようになります。

第 20 分冊 (1994), 第 12 (1998), 23 (2001), 41 (2002), 42 (2003), 43 (2005), 44 (2005), 45 (2007), 32 (2007), 33-34 (2008), 35-36 (2009), 29-31 (2010), 37-38 (2011), 39-40 (2012)。終りの方の諸巻が、いくつかの分冊を合本した形になっているのは、山田晶先生が翻訳なさるはずだった諸巻を引き受けられたためです。巻数から言えば後の方の巻をすでに出版していたために、このような形にするしかありませんでした。

翻訳がここまでライフワークに近いものになってくるとは、稲垣先生ご自身も考えておられなかったと思います。執筆力旺盛な先生は、そのかたわらで『トマス・アクィナス倫理学の研究』(1997), 『神学的言語の研究』(2000), 『人間文化基礎論』(2003), 『講義・経験主義と経験』(2008), 『トマス・アクィナス「神学大全」』(2009), 近刊の『トマス・アクィナスの神学』(2013) などの書物を著して来られました。もし、『神学大全』の翻訳がなければ、これはどのような展開になっていたのか、たとえば『抽象と直観』(1990) の主題を延長して、中世末期から近代にかけての人間精神のありようの変化を、俯瞰しつつ詳細に研究するような大著が生まれていたかもしれないと、想像することは可能です。

とはいえ、『神学大全』を軸にすることによって、最近の稲垣先生は「神学」Theologiaという学問分野そのものに基礎をすえる研究をして来られました。この方向もまた、先生にとって唐突なものではなく、『習慣の哲学』（1981）で到達された形而上学と経験の関わりについての根本的洞察をさらに深める試みであると思います。それは、私のような神学を専門にする教員にとっては、最高に嬉しいことでもあります。

4 バトンの受け渡し

『神学大全』完訳までの歴史を振り返ると、その過程の中で重要な二つの「バトンの受け渡し」があったと思います。ひとつは、高田三郎先生が中心になってすすめておられた翻訳事業が、稲垣先生に引き継がれたことであり、もう一つは、『神学大全』第3部について、これは山田晶先生が非常な情熱で取り組んでおられたのですが、これも稲垣先生に引き継がれたことです。この二つの受け渡しについては、「学問と出版——トマス・アクィナス『神学大全』全訳の歩み——」（熊倉次郎監督、森永エンゼル財団制作、2013年3月）というドキュメンタリー映画で語られています。前者については、私の預り知らぬことなのですが、山田先生からの受け渡しについては、私も小さな役割を果たしましたので、それを最後に書いておきたいと思います。

2001年夏に『神学大全』第23巻が出て、当時稲垣先生が引き受けておられた諸巻の翻訳は終わりました。第3部は山田先生がなさる予定だったのですが、山田先生は本文に倍する詳細を極める註をつけながら翻訳をすすめておられましたので、このペースで行けば、第3部完訳までにあと30年はかかる見通しでした。そこで、創文社の希望もあって、第3部第60問題から後の諸巻（ sacrament論）を稲垣・片山の九州チームに譲っていただけないか、というお願いの使者を私がつとめることになったのです。

当時山田先生は、名古屋の南山大学の近くにある神言神学院の、図書室に近い一室を研究室にして、仕事をしておられました。2002年3月4日が訪問日でありましたが、私は訪問前からすでにカチンコチンに緊張していたと思います。ご挨拶をして、お叱りを受けるかもしれないと思いながら、恐る恐る要件を話すと、山田先生はすでに察しておられたの

でしょう、ほんとうに気軽な感じで「いいですよ」と言われました。そしてその場で、創文社にお電話をさせていただきました。

その後の1時間ほどの懇談は、この上なく楽しいものでした。私は、山田先生の勉強の仕方について、研究室の膨大なカード分類箱を見ながら教わりました。図書室の「教令全集」(Mansi)や教父全集(Patrologia)、も見せていただきました。先生は、カントやヘーゲルやハイデガーについても語られました。その中で私は、この「バトンの受け渡し」が、山田先生にとっても嬉しい出来事であったことを知りました。

福岡に帰ってから、ことの次第を稲垣先生にご報告に行くと、先生はすでに山田先生にお手紙を書いて出しておられたことがわかりました。稲垣先生への私の「お手伝い」は、今も昔もこのように、必要不可欠ではないが、あっても別に困らない、というようなものが多いように思います。